

雅江という街を過ぎると道は草原地帯に入った。

標高が高いからだろうか、連なる山並みに樹木は全く生えておらず、すべて草原で覆われている。真っ青な空に浮かぶ白い雲。360度何処までも続く緑の草原。時々ヤクが群れて草を食んでいるのが見える。標高4000メートルを超えている場所とは思えない程、のどかな風景だ。スケールは違うが、昔バイクでツーリングした事のある九州、阿蘇の草千里の風景が思い出された。

この何処までも続く山岳草原地帯を何時間か走って、最後の峠を越えると眼下に広がる大草原の中に忽然と理塘の街が現れる筈だ。

三年前の旅でこの道をバスで走った時は、康定(成都?)の親戚を訪ねた帰りだという理塘の子供たちが私たちのバスに同乗していた。理塘の街が見えた瞬間、子供達が自分の街に戻ってきた喜びの叫び声をあげたのが印象に残っている。

その理塘の街が現れる瞬間をもう一度見たかったし、窓の外は眠ってしまっただけではもったいない様な景色が広がっているのだが、なさけない事に車に弱い私は自己防衛本能が働いてしまうのか、いつもバスに乗ると直ぐに眠くなってしまって目を開けている事ができない。いつしかまどろんでしまった。

ガ、ガ、ガ、、、、突然悪路に入ったような、バスの揺れにうっすら目を開けると、やたらに埃っぽい街並みが見えた。あれ? 街だ・・・、うわ! 理塘!? もう着いちゃったの? 私が目を覚ましたのと殆ど同時にバスは理塘のバスターミナルに到着した。

前回、康定から同じ道を走った時には、理塘に到着したのは、たしかもう夕暮れだった。道路事情が良くなった為か、今回のバスの旅はいつも私が思っているよりずいぶん早く目的地に着いてしまう。時計を見るとまだ午後の2時だ。バスを降りると、後部の荷物を係の者が降ろしているところだった。無造作に、地面の上に転がして置かれた私のザックは土ぼこりで真っ白になっている。

「ぎゃ～っ!! 何これ～!!」思わず声をあげる私に、係のおじさんは「大丈夫、大丈夫～! ハッ、ハッ、ハッ・・・」と声をあげて笑っている。ハッ、ハッ、ハッ、って、、、おじさん! うわ～ん! こんなんじゃ、背負えん!!

ホコリだらけのザックはとりあえず脇に置いて、先ず例によって明日の目的地「稲城」へのバスチケットを買いに窓口へ向かった。チベット遊牧民の街「理塘」は魅力的な場所だが、帰りにゆっくり過ごすつもりだ。四姑娘山メンバーと別れたのは8月5日だったが、成都でぐずぐず



している間に既に8月の半ばに入っていた。高山の夏は短い。一日でも早く目的地の亜丁に急ぎたかった。

ところがである。稲城へのチケット買おうと窓口へ向かった私は、

「明日は稲城行きのバスはない。次のバスは明後日だ」

と言われ、愕然としてしまうのだ。

「えええ～!! そ、そんな～!!」

この期に及んで、また足止めかあ～!?すると私の絶望的な顔を察知したらしいサービス員は思いがけない事を言い出した。

「急いでいるなら、今、裏に稲城行きのバスが止まっているからそれに乗って行きなさい。」

「ええ～!! い、今あ～!?」

「そうよ、急いで!!もう出るよ!」

「は、はいっ～!」

慌ててバスを降りた場所に向け戻り、理塘まで一緒だったスウェーデン人の彼女に挨拶する間も無く脇に置いてあったザックを抱え上げると、服をホコリまみれにして寝ぼけと長旅の疲れでぼんやりした頭をふりながら、サービス員が指差した方向にバタバタ走る。な、なんでこうなるの～!?

ゼイゼイ息をつきながら裏に回ると、なるほど道路に『康定—稲城』と書かれた大型のバスが止まっていた。おんぼろではあるが普通のバスだ。何じゃ、こりゃ～!このバスも今朝、康定を出たのに違いない。最初からこのバスに乗っていれば良かったんじゃないか! 全く無計画な行動とは疲れるものだ。

こちらのバスは乗客も主に中国人旅行者と見られる人達が乗っており、先ほどまで私が乗っていたバスよりはるかに普通に快適そうなのであった。でも、いいや。チベッ

トの庶民バスは面白かったから。私の旅では快適さより面白さの方が重要だ。

稲城までは理塘からバスで三時間程だということだった。それなら日没前に稲城の街に着く事ができる。今日中に稲城まで辿り着く事ができるなんて思いもしなかった。さっきは慌てすぎて考える余裕もなかったが、そう思ったら胸がドキドキしてくるようだ。

稲城は今回の目的地、亜丁にアプローチする基点となる場所であり、前回の旅で最も印象に残っていた街でもあったのだ。この辺の土地はチベットの言葉でカムと呼ばれ、カムパと呼ばれる土地の男たちは大柄で厳つい独特の風貌だ。浅黒い顔に鋭い目、長く伸ばした髪、腰に大きな短剣をさした、まるで山賊のような男たちが練り歩く稲城の街に初めてバスから降り立った時は思わず呆然としてしまった。それまでに通過してきていた理塘もカムパの街だが、その時まではバスで街から街へと移動するだけで、街の様子を見る機会などなかったのだ。

道端の地面に直接将棋版を置いて対局している街頭棋士の周りには見物人で人だかりができ、それぞれが次の一手をああしろ、こうしろと自分勝手にはやしたてている脇では、怪しげな漢方薬のような物が売られていて、何だろう？と覗きこむ私に、山賊のような男が親指を立て、これはいいぞ、お前買うか？というような仕草でニヤリと笑った。

何なんだ、この街は！すっごく面白いぞ～！と思ったのもつかの間、団体行動の悲しさで、その時もゆっくり街を見る時間は与えられず、人一倍好奇心旺盛な私はひそかにフラストレーションを溜めていたのだ。その時以来稲城は、私の中では憧れの幻の街だった。その街が今、手を伸ばせば届くところまで近づいて来ていた。

それにしても理塘まではただウキウキしていた私だが、ここまで来て急に気になってきたのは季節の移り変わりだった。前回訪れた三年前の7月の末には、道路の周りに広がる草原には色とりどりの高山植物の花が咲くほどに溢れかえっていた。それが全く見られない。青くひろがる草原の草の色にも心なしかみずみずしさが感じられず、黄ばみはじめる一歩手前なのではと思えてきた。も

しかしたら・・・もう夏は終わってしまったのだろうか。

今回目指している亜丁という場所は街ではなく山の中だ。夏でも夜になれば気温がかなり下がるために、ホカロンや羽毛のシュラフがなければ眠れないような場所で、自然保護区とされている場所の宿泊施設は只のテントだった。四姑娘山に登った時のキャンプ場でも私たちが今年最後の客で、この後キャンプ場は来年まで閉めるのだという話を聞いたことを今になって急に思い出し、にわかにな不安になってきた。

もう夏が終わっていて、亜丁の宿泊施設も閉まっていたら・・・。おそらくあそこに滞在する事は不可能だろう。それより、今の時期の亜丁はどんな様子なのだろう。下界の人間である私には、高山の世界は予測もつかない。ここまで来て、亜丁に行けなかったら・・・。

理塘を出ると先ほどまで快晴だった天気はいつしか曇り空に変わっていた。バスは再び峠道を登り始め、車内の気

温も急速に下がり始める。空気の冷たさが服を通してシンシンと染み込んでくるようだ。

前の席に座っていた中国人のおじさんがザックから真っ赤なジャージをとりだし着込んでいた。峠の尾根道を走っている時、誰かがトイレに行きたいと車掌に告げたらしくバスは一時停車すると、男性はバスの左手、女性は右手方向に下りてそれぞれ用をたす。いつの間にか雨が降り出していた。

身を切るように冷たい風がビュービュー吹き、気がつけば雨の中には雪が混ざっている。用をたしている目の前の地面も凍りつき、ところどころに雪が薄く積もっていた。うわ～ん！やはり高山ではもう夏は終わってしまったのか。不安が的中してしまったような気分が一気に悲しくなったが、もうここまで来てしまったのだ。なるようになれ。

稲城に着くまでの道中はドキドキしたり、不安になって悲しくなったり、開き直ったり、まるで遠くに住んでいる恋人に会いに行くような気分だ。今から思えばやっぱり私はあの土地に恋をしていたのかもしれない。旅先で出会って淡い恋心を抱いた人が忘れられずに再び会いにきてしまった。そんな風にいえばあの時の私の気分ぴったりくるような感じだ。土地に恋をするなんて変だけど、本当にそんな気持ちだった。



稲城の男 前回、稲城を訪れた2003年に撮影